

## 9月3日（火）元米捕虜の家族の皆さんとPOW研究会との交流会

### 今年の交流会の特徴

午後2時ごろから、外務省招聘プログラムによって来日した元米捕虜家族の皆さんと、POW研究会との交流会が行われました。これまで毎年交流会場としてきた大阪経済法科大学麻布台セミナーハウスが今年から使用できなくなったため、外務省内の第161号応接室を使つての開催となりました。そのため時間も限られ、参加者も例年のように広く一般の方にも呼びかけて募ることができず、P研の会員9人と、米捕虜との交流に長年取り組んできた元会員1人の計10人が参加しました。

米側はこの招聘事業で来日した元捕虜の息子さん・娘さんたち計8人で、会の司会進行は、外務省北米第一課 兼北米交流室 室長の秋山亨平（こうへい）氏が、英語で行いました。通訳も外務省で2人も用意してくれましたが、時間の関係から、通訳は逐語訳のようなものではなく、話者が全部話し終えた後に、その要点を日本語で説明するというものになりました。各氏のスピーチのごく簡単な内容と、その後の質疑応答の一部を掲載します。

### 父たちの捕虜体験とその後

#### 1. リチャード・スチュパンスキー Richard A. Szczepanski 65歳

父ジョセフは戦後捕虜時代の寄生虫や骨折のために長い間苦しんだ。さらに心の状態は厳しかった。トラウマから大量に酒やたばこを飲むようになり、家庭は混とんとしたものとなった。自分は父と距離を置き、早く独立して家を出た。しかし弟はずっと父の元で暮らし、父と同じようにアルコール依存になってしまった。それでも戦後父が大学を出て教師として働いたことは尊敬している。



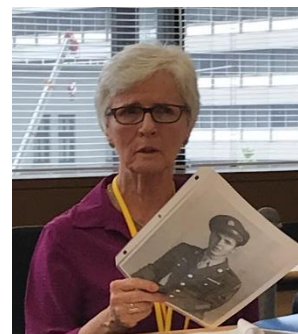
#### 2. ジム・ネルソンさん Jim Nelson 71歳

父ジョンはフィリピンのコレヒドール島に配属され、降伏後は捕虜収容所を転々とし、ついに船で日本に送られた。その間のビタミンAの不足と、日本で目を保護しないで溶接の仕事をさせられた結果、完全に失明してしまった。戦後帰国して病院に入り、退役軍人のためのプログラムに参加した。やがて母と出会って結婚した。



#### 3. ジョアンナ・シーバークさん Joanna Sieberg 71歳

父チャーリー・ジェイムズはニューメキシコ州の州兵だったが、フィリピンに派遣されて砲兵としての任についた。そして日本軍の襲撃によって降伏しバターン死の行進をさせられた。その後地獄船「長門丸」に乗せられて日本へ移送され、大阪の鉄鋼所や大江山の鉱山で働かされた。戦後横浜からフィリピン経由で帰国し、妻の元へ帰った。父は捕虜生活の結果背骨を傷めて4カ月も歩けなかった。また狭いところに閉じ込められるのをとても怖がった。それでも家族を愛し前向きに生きる人で、日本人のことを悪く言うことも無かった。ただ多くの戦友が亡くなったことを悲しんでいた。



#### 4. ドーン・クレイさん Dawn Clay 72歳

父ウェイン・ミラーは、捕虜になってから地獄船で大変な思いをして日本に移送され、さらに満州に送られ、最後は奉天に收容されていたがソ連軍によって解放された。戦後は後遺症に苦しみ、日本人を避けることもあった。私は若い日本人の医師に父が日本語で何か話したのを聞いたが、それは「私に触るな」だった。「それが戦争なんだよ」と父はいつも言っていた。



#### 5. ジョージアン・バーレイジさん Georgianne Burlage 64歳

父ジョージはフィリピンに従軍し、コレヒドール島で捕らえられ、マニラで行進をさせられた。その後地獄船で台湾に送られ、さらに船は日本に向かって門司に着いた。それから東京に移送され、仙台の近くの鉱山で働かされた。戦後は従軍記者として朝鮮戦争にも従軍し活躍した。



#### 6. アンドレア・クレンパさん Andrea Krempa 62歳

父ローレンス・ティプトンはマニラに従軍し、コレヒドールで降伏して、カバナツアンに收容された。その後地獄船タテイシ丸、続いて真洋丸に乗せられた。日本へ移送される途中に、米潜水艦による攻撃で真洋丸は沈没した。船倉から抜け出して漂流し3マイル泳いで海岸にたどり着き、フィリピン人のゲリラに助けられた。その後救助に来た米潜水艦でオーストラリアに送られ、帰国することができた。父は静かで優しい人で、かつて助けてくれたフィリピン人に感謝して、フィリピンの学生や孤児の世話をしたりした。



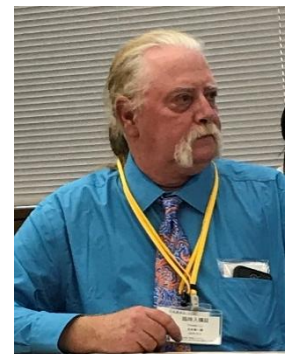
#### 7. アラン・オーバマイアさん Allan Overmier 70歳

父ウィリアムはフィリピンで捕虜になって、その後地獄船で台湾を経て日本の收容所に送られ、横浜の造船所や福島の炭鉱で働かされた。父が收容所から解放された時の写真を、そこにいる人（P研の笹本さん）が見つけたので見てほしい。また昨日は父が働いた造船所も見られたのでよかった。



#### 8. ハロルド・エイモス・Jr.さん Harold Amos Jr. 62歳

父も同じ名前。衛生兵としてマニラの陸軍病院に働いていたが、降伏してバターン死の行進に参加させられ、カバナツアン捕虜收容所に收容されていた。そこを米軍特殊部隊が襲撃して、父たちは救出された。212ポンドあった体重は、解放された時94ポンドしか無かった。



## 質疑応答

Q：捕虜だったお父さんが狭いところを怖がったというのは、どのような体験からだと思うか？

A：狭い船倉に詰め込まれて危険な航海をしたことだと思う。

Q：お父さんが戦争のトラウマから、いらだったり不安定になった時どう対処したか？

A：・外に出るとか、逃げるとかした。

- ・家では5人子供がいたが、一緒に食事をするというのが家族のルールだった。食事中に父の様子から怒りそうだと感じた時は、大急ぎで食べ終わってパッと部屋の外に出た。
- ・父は立ち上がって外に出て行き、長い時間戻ってこないことがあった。どうしてそんなに外にいるの？と母に聞くと、母は一人でいる時間を与えてあげて、と言った。
- ・父は穴倉みたいなところには、絶対に入れなかった。

Q：病状に対するカウンセリングみたいなものはあったのか？

A：・それは無い。当時は国からも軍からも無かった。

- ・帰国してカウンセラーに会った時、アドヴァイスされたことは、「帰って温かいご飯を食べなさい」ということだった。
- ・父など米兵の中で生き残った者は、汚名を着せられたと感じていた。自分で降伏したわけではないのに、捕虜となったことで汚名を着せられるのが辛かったようだ。
- ・PTSDを負った父が心の平安をどこで得ていたかと言うと、それは退役軍人の集まりだった。集まって経験を話したり、一緒に買い物に行くとか、経験を共有することで心が安らいだようだ。
- ・父は悪夢とかそういう症状は無かったが、1日3回シャワーを浴びて着替えるとか、人混みを嫌うとか、食料を1か月分はため込むとか、そういう奇妙な癖があった。
- ・夜悪夢で叫ぶような時、母は「大丈夫よ、そっとしておいてあげて」と子どもたちに言った。
- ・牧場だったので、外に長くいたりした。

Q：心の傷はあなた方、子どもたちにもあるのか？

A：・傷と言うより使命を感じている。私たちは父たちの体験を他の人に伝えるのを使命だと思っている。

Q：このプログラムを続けた方がいいと思うか？

A：（一同）もちろんよ。もちろんさ。



外務省内の会議室で、元米捕虜家族の方々を囲んで参加者集合写真

（記録：小宮まゆみ）